

栄光

説教

『キリストの涙』

ヨハネによる福音書 11 章 28 節～37 節

東洋英和女学院中部・高等部教諭 上野峻一

説教・「キリストの涙」	上野峻一教師…1
特集・旧約聖書の	ことば…2
説教・「何に目を留めるか」	岸俊彦牧師…5
須田則子先生との	懇談会報告…6
上野峻一先生との	懇談会報告…6
臨時教会総会	報告…7
長老のファイル…7	
牧師の書斎から…8	

「イエスは涙を流された」。35節の御言葉です。この一節に、どれだけ多くの人たちが心を惹かれ、頭を悩ませてきたでしょう。主イエスもまた、私たち人間と同じように涙を流されたのです。あるいは反対に、キリストは神の子であるにも関わらず涙を流すのかと、この一節の意味を問いかけます。しかし、ヨハネ福音書は、主イエス・キリストが流された涙の意味を、その詳細を記すことはしません。ただ事実として、その出来事を記述します。キリストは、確かに涙を流された。それも、この言葉は涙が目から一粒流れたというようなものではなく、主イエスの両眼に涙が溢れ頬を伝ったという意味合いです。涙を流すというのは、とても印象深い出来事のように

に思います。人が泣くというのは、その理由がどのようなものであったとしても、周囲の人々も自分自身も、何か特別な記憶として残ります。実際イエスさまが涙を流されたということは、人々の記憶に刻まれました。理由は明確ではないにしても、このように聖書に記され、今日まで語り継がれています。理由が明確ではないからこそ、かえって真実があるのかもしれない。理由のない涙、理由がわからないからこそ、そこに真実があると考えられます。

愛する家族を失ったマリアは、深い失意の底にあったことがわかります。マルタは家に帰ってマリアを呼び、「先生がいまして、あなたをお呼びです」と耳打ちします。こっそりと、小さな声でマリ

アに伝えたのです。他に大勢いる人たちに聞こえないかのようにマリアだけに伝えました。マリアは、その言葉を聞くと、すぐに主イエスのもとに行きます。「イエスさまがいまして、あなたを呼んでいます」。実は「いらして」と翻訳された言葉は「傍らにいる」という意味です。単純に「来た」という表現ではなくて、「傍らにいる。そばにいる」という言葉を使っています。そして、「あなたを呼んでいる」というのです。

マリアは主イエスのおられる所に来て、イエスさまを見るなり足元にひれ伏して「主よ、もしここにいてくださいましたら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに」と言います。マリアはイエスさまに對して、まさに怒りや不当感、敵意やうらみをぶつけていたようにも見えます。「なぜ、どうして」と、イエスさまならお癒しになられたはずなのに、本当に深く信じていたからこそ、足元にひれ伏しながら、彼女の激しい感情を表していたと思えます。33節「イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、憤り

を覚え、心を騒がせて、言われた。どこに葬ったのか。彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言います。そこで主イエスは涙を流されます。

ラザロの死の現実を前にして、主は涙を流されたのです。けれども、マリアやユダヤ人たちと決定的に違うものがあります。それが、主イエス・キリストは、この死という、涙へと促す「根本原因」に勝利された方であるということですから。それが、神の子であり、救い主・キリストです。主イエス・キリストは、十字架で死なれ、三日目によりがえられます。死んで葬られたラザロを呼び起こします。死は、キリストの前では、終わりではないのです。これからも、私たちは死を前にして、涙を流す時があるはずです。しかし、私たちの傍らには主が共におられ、私たちは主イエスのもとへと向かうのです。キリストが共に流してください。涙は、私たちを慰め、新しい希望への扉を開きます。この方こそが私たちを罪から救い出し、死で終わらない確かな救いを与える方です。

旧約聖書のことば

旧約聖書は、天地創造から始まり、イスラエルの民と神の関係と歴史、
預言書・詩編・神との約束が 39 巻にわたり記されています。
多岐にわたる旧約聖書の中で、特にあなたが好きな言葉を教えてください。

主を畏れる

尾崎幸子

中高の校長室の前だったかに「主を畏れることは知識の初めなり（箴言 1・7）」という額がかけられていた。まったくもってミッシヨンスクールにありがちな聖句の引用である（笑） それでもわが母校の理念だし……とも思っていたが、ほかのミッシヨンスクールも軒並みこの聖句を理念としていると後で知って笑った記憶がある。

その額を最初に目にした子どもの頃は、「旧約の神様は、雷を落としたり、国を分断させたり、何か怒っていて怖いよね」ぐらいに思っていたものだ。日本では「ばちがあたる」という考えが結構浸透していて、神仏とか祟りとかを恐れがちだ。実際旧約の神様は結構怖いので、自分にもその感覚があつたのかもしれない。が、時を経て信仰に向き合うようになると、自然と「畏れる」の真意を考えるようになった気がする。

そもそも「畏れる」という言葉は、「物事を恐れてたじろぐこと」、あるいは「偉大な存在に対して畏まつて敬うこと」を意味する。ということは、「主を畏れる」にはまず神が人知を超えた偉大な存在であると認める必要があることになる。神はモーセに「私はある」（新共同訳 出エジプト 3・14）と言われたが、「神を信じる」ではなく「神が在る」と知ること、これがまさに知識の初めということなのだろう。

人は、常に大小さまざまな問題に直面し、それらを解決しながら生きていく。何かの選択に迫られたとき正しい選択をするために必要なのが知識である。そして知識とは、神を畏れることから始まるのだから、自分の思いだけでなく畏れをもって神に頼り、御心になった選択をすればよい。……と、頭ではわかつてはいるがどうにも難しいし、自分で書いていながら耳が痛い。なので、戒めも救いも込めて最後にこの箇所を。「あなたのなすべき事を主にゆだねよ、そうすれば、あなたの計るところは必ず成る」（口語訳 箴言 16・3）

好きな聖句 詩編23編、コヘレトの言葉3章

中西 泉

気が付けば85歳になっていました。5月の日曜日、岸先生手書きの、誕生日カードをとてもうれしく頂きました。人生100年の時代とは言え、いつ何が起きてても不思議ではない年齢です。大好きな詩編23編がますます身近に感じられるようになりました。「主は私の羊飼い 私は乏しいことがない」から始まり、「命あるかぎり私は主の家に住もう 日の続くかぎり」。美しいメロディーが聴こえてくるような神様の恵みをうたったこの箇所が一番好きです。

そして、二番目、コヘレトの言葉3章「天の下では、すべてに時機があり、すべての出来事に時がある」「人が労苦したところで、何の益があるうか。私は、神が人の子らに苦勞させるよう与えた務めを見た」。

「神はすべてを時に適って麗しく

造り、永遠を人の心に与えた。だが、神の行った業を人は初めから終わりまで見極めることはできない」。

ナオミ会では時間をかけてヨブ記を学びました。ヨブは長い苦難の末に、自分の罪を悟り、悔い改めて神に向き合います。そこで神はヨブを顧み、以前にまして祝福してくださいました。

私の85年の人生は月並みに、山あり谷あり、悲しみの時はコヘレトの言葉を素直に受け入れるどころか反発をしていました。しかし年齢を重ね、多くを経験し、またヨブ記を学んでいくうちに、コヘレトの言葉が素直に入って、御心に委ねて生きようと思えたのです。日曜ごとに説教で聞く人間の罪、今信じましたと言ってもすぐに忘れてしまう不信仰な自分、傲慢な自分がそこにいました。

ある日の入門講座でカール・バルトの言葉を知りました。

「神を真面目に信じることに、喜んで信じることに、困難の中で主イエスだけをおそれること」。

明るい気持ちで今日一日の感謝を捧げています。

一人より二人のほうが幸せだ

榎原 正

50余年、共に連れ添った妻を主の元へ帰して1年を過ごしているこのとき、原稿依頼を頂きました。頭に浮かんだのは「コヘレトの言葉4章9節〜12節」でした。

「二人より二人のほうが幸せだ」。

妻温子は高校卒業後、私立大学に就職し、結婚後も63歳まで勤務していました。その後は再就職もせず、現在は長男が同居していますが、夫婦二人だけの生活に甘んじていました。礼拝出席、夜の祈祷会、夕食がてら居酒屋へ、また毎度の妻の病院通いも付き添っていました。

妻を御国へ送ったのち、半年後ほどで私の体に不調が出てきました。他愛ない夫婦間での痛い苦しいも心を開いて相談もできない。昨年夏に左の首筋と肩に痛みを感じて整体院に通い始めました。しかし回復の兆しが見えず、総合病院

で検査を受けて、動脈硬化が発見され1週間入院、ステント留置術を受けることになりました。

「二人は不幸だ。倒れても起こしてくれる友がいらない…三つ編みの糸はたやすくは切れない」。

三本のうち一本が無くなり、主と二人でこれから歩んでゆく。主は何も答えてはくれない。なんとという空しさ。

しかし、私の体を気遣って祈ってくださる教友がいてくださることは力与えられ感謝です。

寒い夜、並べて敷いた夜具から手をつないで寝るだけでも寒さに堪えることもできた。これも空しい。

ことあるごとに自分の信仰を確認するために、使徒信条、主の祈りを口ずさむ。

神様、母の胎内から出た折、私の鼻に息を吹き入れてくださいました。その時以来81年、お守りくださって、今も生かしてくださいる神様、心から感謝いたします。私の願いではなく、御心に従う者となさせてください。主の聖名によって祈ります。

5 年日記

門田由紀子

「何事にも時があり天の下の出来事にはすべて定められた時がある」(新共同訳 コヘレト 3・1)

50歳を機に5年日記をつけ始めました。その日にあった出来事や感じたこと、また読んだ本などを備忘録的に書きとめ、2冊目となった今の日記はちょうど半分折り返しにきたところです。連用日記は毎年同じ日の記録が1ページに積み重なっていくので、1年前の、また何年か前の自分と向き合うことができます。日々の振り返りの中で、何事にもふさわしい時が与えられていることに気づくようになったことは、私にとって大きな意味を持つものとなっています。子育てや介護、仕事、人生のその時々、不安や悲しみ、辛く思い通りにいかない時、いつも最善の道を神様が用意してくださっていたことを知るのです。すべてのわ

ざに時があり、あの時があり今があると思えるのです。そして、そこに家族、友、私を支えてくれた人がいたことを思い出します。「ひとりよりもふたりが良い。共に労苦すれば、その報いは良い。倒れれば、ひとりがその友を助け起こす」(新共同訳 コヘレト 4・9、10)。さらに、人生を空しく感じたり、労苦の中にあつても、幸せを見出すことができるように、喜び、楽しむことも、神様は賜物として与えてくださっていることに気づきます。

常に主が働いてくださり、共にいてくださることを、日記を通じて思い起こし、全ては御心に安心してお任せすればいいと思うのです。

ですから、日々を思い煩うことはせずに：とは思いますが、私は弱く、悩まなくてもいいことまで悩んでしまう性格です。そんな私にできるのは、礼拝を守り、喜び、祈り、感謝して、困難の中で主だけを畏れること。今日一日を精一杯生きることができるよう、信仰を持ち続け、前に歩んでいくことだと思っています。

旧約聖書の中で私が好きなことば

中西尊司

旧約聖書の中で私が好きなことばの一つに、「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない」があります。日々の生活において、このことばを思い出すと、必要なものはすべて与えられ、自然に勇気が出てくるような気がします。

数年前、私は新しい職場に転職しましたが、一般的には50代の転職はリスクが高いといわれるとおり、私も会社のカルチャーややり方に慣れるのに苦労しました。入社後すぐに大きなプロジェクトを任せられたときは、楽しみとともに大きな不安やプレッシャーを感じました。そんな時、このことばを思い出しました。短いですが心に深く響くことばです。

私を導き、守ってくださる方がいるというメッセージはまさに私が必要としているものでした。こ

のことばを思うとき、不安な気持ちちは和らぎ、良い方向に導かれていくと信じることができました。実際の仕事にあてはめると次のようなプラスの変化があったと思います。

① チームワークの強化

自分一人ですべてを行わなければならないというプレッシャーから解放され、皆の意見や助けを素直に受け入れることができました。全体の連携が強くなりました。

② 冷静な対応

予期せぬ問題が起きたときも、このことばを思い出すことで冷静に問題を分析し、解決策を見つけることができました。

③ ポジティブな姿勢

日々の小さな成功に対して感謝の気持ちを持つようになりました。感謝の気持ちはチームみんなの気持ちをポジティブにしたと思います。

この経験を通じて、この詩編23編のことばは実際の生活において力強い支えになることを実感しました。このエピソードは、今でも私が困難に直面するたびに思い出し、心の支えとしています。

説教

『何に目を留めるか』

レビ記19章17節〜18節
ヤコブの手紙2章1節〜13節

岸 俊彦

「私たちの主、栄光のイエス・キリスト」（ヤコブ2:1）。

この言葉に礼拝とは何かが語られています。私たちは礼拝で主イエス・キリストを賛美します。主に栄光を帰します。目には見えない方を望み、祈り、共に御言葉に聞き従います。そして、それぞれ場に遣わされます。礼拝者として御言葉に聞き従って、忍耐強く歩みます。信仰によって、この世の務めを果たすために御言葉によって支えられ、強められ、聖霊によって導かれます。この世には誘惑があり、試みがあります。私たちには欲望があります。試みや誘惑が、私たちの欲望に働きかけ、欲望がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。礼拝者として御言葉に聞き従い、信じて生きようとするのですが、この世にある限り、欲望や、試みと誘惑によって、礼拝者である私たちは、主か

ら引き離され、神の意思を示す御言葉に、正直なところ、服従して生きることができません。そのため、繰り返し礼拝に招かれ、私たちの主、栄光のイエス・キリストへの信仰に立ち帰るのです。主をほめたたえつつ、悔い改めます。七転び八起きです（箴言24:16）。この世にあって、誘惑と試みに負けても、また立ち上がるためです。

私たちが礼拝する主イエス・キリストは、その苦難と死、復活と昇天の生涯によって、私たちに十二分に恵みを注いでくださっています。キリストの恵みによって私たちは主を信じ、告白し、礼拝する者にしていただいています。何と幸いなことでしょう。

神の言葉に聞き従えない罪人である私たちでありましても（ローマ3:10）、世の屑、あらゆるものの滓とされていましても（イコリント4:13）、たとえ虫けらの

ような私たちでありましても（詩22:7）、宝の民（申7:6）、イエス・キリストのもの、神に愛され、聖なる者としていただいています。この主の恵みを思い起こし、感謝し、その恵みのもとに生かされる礼拝者として、その自覚を新たにするために、私たちはこうして集められ、礼拝しています。

礼拝する私たちは、「神は人を分け隔てなさらない」（ローマ2:11、ガラテヤ2:6）ことがよく分かるのです。私たちを含め、礼拝に集められた様々な人を見れば分かることです。

それにもかかわらず、教会の中に壁がありました。ヤコブの教会では、金持ちと貧しい者の壁です。礼拝のために自宅を提供し、教会を経済的に支えていた裕福な者がいました。彼のお仲間が礼拝に出席すれば、そのお仲間を特別扱いしました。他の教会員たちも同様でした。貧しい者が出席すれば、「地べたに座っていたら」と素っ気も何もありません。礼拝者が一体全体何を見ているのでしょうか。

「分け隔てをする」というギリシア語の元々の意味は「顔を見る」です。誰の顔を見て、誰の顔色をうかがっているのでしょうか。「目を留める」とは、よくよく注意して見ることです。顧みるという意味もあります。仲間の金持ちを顧みるのでしょうか。

私たちは、こんな漫画のような極端な分け隔てをするのではないでしょう。分け隔てすることのない神を信じ、礼拝しているのですから。えこひいきが良くないことだとわかっているのです。しかし、それにもかかわらず、私たちは、本当のところ、何を見つめているのでしょうか。損得、自分の欲望、人の思い、人のまなざし…。

礼拝は、「私たちが見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ」（Ⅱコリント4:18）ためにあります。偏り見るのではない神が、私たち一人ひとりにまなざしを注いでくださっていることに気付くためにあります。

キリストの体である教会が、二つに割れることは本来あつてはならないことです。富める者も、貧しい者も、主にある兄弟姉妹です。キリストを頭とする、キリストの体である教会に繋がる肢です。

須田則子先生との懇談会報告

岸先生の在任最後となる今年度は、当教会に縁のある先生を説教者としてお招きしています。5月5日は須田則子先生をお招きし、「義」と題した説教の後で懇談会を持ちました。

須田先生は1990年に当教会で受洗、その後献身を決意し、1997年に東京神学大学博士課程前期を修了。鎌倉雪ノ下教会、阿佐ヶ谷教会での働きを経て、2003年より恵泉女学園中学・高等学校の教諭を務め、千歳船橋教会の協力牧師でもあります。

須田先生は、私の勤務する金融機関のかつての先輩で、仕事では厳しいけれど、終業後はよく一緒に美味しいものを食べながら映画や小説の話をしていました。その後退職して世界各地を巡る旅に出ることにされて、周りはとても心配しました。須田先生はその旅で様々な出会いや危険な目にも遭い、救われた自分に「なぜ自分なのだろう」と考えた末に神様の存在を強く感じられたそうです。今では教師として聖書について教えてい

る姿に神様の恵みを感じます。

懇談会には恵泉女学園のOGの方が多く出席しました。須田先生はキリスト教文化の授業を担当し、生徒は興味を持って授業を受ける人が多いそうです。恵泉は創立当初から「聖書」「国際」「園芸」を教育の柱としていますが、大学の募集停止により社会園芸学科がなくなりました。出席者からの園芸教育について危惧する質問に対し、「園芸は必修授業であり、ジャガイモや小麦の栽培、花壇用の苗作りなど行っているので安心してください」と回答がありました。

また、須田先生は鎌倉雪ノ下教会等で主任牧師の交代を経験されており、主任牧師交代時に留意する点を聞かれると、「牧師交代後も礼拝出席者が減らない、活動が停滞しないことが大切」と話されました。教会員は牧師につながるのではなく、一人ひとりがキリストにつながって主の教会を建てるのが大切であり、教会員はつい新任と前任と比べることがあっても、それぞれの賜物の違いを知り教会を守っていくことが大切だと感じました。

(酒井由紀子)

上野峻一先生との懇談会報告

上野峻一先生を説教者としてお迎えした礼拝の後、懇談会の時を持つことができました。

先生の近況として、教務教師を勤めておられるミッシヨンスクールでのご様子を伺いました。当教会の教会学校にも同校の生徒が通っており、みな明るく聡明で大人びています。ただ、学校では学生らしくはしゃぎ、のびのび過ごしているようでほっとしました。上野先生が生徒たちに懷かれている様子もよく伝わってきて、微笑ましかったです。

若者伝道について伺うと、初等部で既にキリスト教に慣れ親しんでいる生徒が多く、既出の題材を扱う際は工夫が必要で、教師の力量が問われるとのことでした。確かに教会学校でも、キリスト教主義学校の初等部に通う子どもたちは、聖書の質問にも元氣よく答えられます。CS教師にとっては有難いことですが、学校教諭の立場ではちょっとした苦労になるというのは意外でした。

また、学校では毎年全校のうち

2、3人程度受洗者が与えられるようです。これを多いと取るか、少ないと取るかは人さまざまでしょうが、私にとっては多く感じられ、励まされる数字でした。

当たり前ですが、学校でキリスト教の授業があっても受洗はできません。通う教会があつてはじめて受洗できるのであり、教会と学校が協力し、両輪となって若者伝道を担っていくのです。そのため、学校と各教会のCS教師との懇談会もあり、分団になって意見交換を行います。上野先生が当教会の伝道師の時、二人で複数校を回りました。時が経ち、経堂北教会に在籍していた先生方が、教務教師として教会に子どもたちを送り出してくださるのは有難いことです。今年も新中学1年生が当教会に通信してきています。教会学校の役割を果たしたいものです。

懇談会では、牧師をお迎えするにあたっての心構え、今こそ伝道の時であることなどを伺え、示唆に富む内容でした。一を伺えば、十を返してくださるので、あつという間に時間が過ぎ、充実した懇談となりました。

(原 良介)

臨時教会総会報告

5月26日の主日礼拝後に行われた臨時教会総会は、64名の出席を得て成立しました。出席してくださった皆様、ありがとうございます。

今回の議題は、牧師館改修工事に関する件でした。今まで折に触れ、岸牧師からも礼拝堂の建替えの際には容積率の関係から同規模の会堂は立てられない、という話がされてきました。今回の牧師館の建替えについても容積率の関係から新築はできず、改修という形で容積率の問題に抵触しない形で工事の提案となりました。

提案に対して、耐震性のことや、基礎をしっかりやり直すのか、また、今回の改修プランは松谷祐二先生は了承しているのかなどの質問があり、岸先生が回答された上で、議案は賛成多数にて承認されました。教会員の皆さんが、新しく牧師を迎える準備をよいものになるようにと、真剣に考えてくださっていることを改めて知り、感謝の気持ちでいっぱいになりました。その思いにしっかりと応えられ

るように、この改修工事が適正に問題なく行われるべく、岸先生をサポートしながら長老会がなすべき責任をしっかりと果たしていきたいと思っています。

さて臨時総会でも話に上りましたが、礼拝堂の改修問題については、皆様と松谷先生と共にこれからじっくりと考えていきたいと思います。

今回改修する牧師館は木造建築で、次の大規模修繕は20年後位になるかと考えられます。現礼拝堂は鉄筋コンクリートですから配管などをメンテナンスしながらあと20年もたせることは可能でしょう。そして20年後にどういう経堂北教会にしていくのかを、時間をかけながらともに考えていきたいと思います。

「20年後」、この礼拝堂で共に礼拝を守っている人もいれば、天の国から、共に礼拝している人もいられるでしょう。そちらのほうが多いかもしれません。でも20年後、さらにその後、この経堂の地でどのような形で神様を賛美する場所を持つのか、神様の導きを信じて共に考えていきたいと思います。(大友太郎)

長老のファイル

6月の長老会はコロナ前と同様、昼食後から行われました。通常の報告の後、定期教会総会、臨時教会総会の記録確定から始まりました。牧師館改修工事は9月上旬から始まります。

6月の行事として、初夏の集いのプログラムなどの確認、女性用和式トイレ改修のこと、インターネット回線の新設(今までは岸先生個人の回線を利用させていただけ)、今年度後半の説教を外部の先生方をお願いする予定、対外援助に関する件、司式・礼拝当番の確認、などを話し合いました。

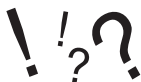
財務からの5月末までの報告では、出席者は増えてきているのに、前年度と比べると礼拝献金(席上)が減っており、ほとんどの項目で前年度を下回っているそうです。このままだと総会で可決された予算を達成するのが難しくなりそうです。もちろん無理にとは言えませんがご協力をお願いします。とりあえずは夏期献金です。会員の高齢化に伴い、ボーナスのない

生活の方も多く、そうであっても物価高騰で色々大変だと思いが、できる範囲でお願いしたいのです。よろしくお願いします。

私は今年度もバザーの係になりました。今年こそバザーの開催復活を、と思っておりましたが、いまだにコーヒーマシーンも再開できず、牧師館の改修工事もあり難しくそうです。6月中には委員会も開く予定で、7月に長老会にはかる予定ですが、今年もミニバザーになりそうです。外部献金の目的もあり、少しでも売り上げたいところろです。良いお考えがありましたら、ぜひ教えてください。また、少ない人数でやっていますので、委員としてでなくても当日のお手伝いもお申し出ください。よろしくお願いいたします。(志摩泰子)



個人消息



牧師の書斎から

5月の終わりに東京教区総会が富士見町教会で開催されました。教会を会場とするのは5年振りのことです。240の教会・伝道所から350人の議員が出席して、2日間の協議がなされました。教区総会の重要な議事は選挙です。今回は、三役選挙、常置委員半数改選、教団総会議員選挙と、選挙が続きました。選挙の合間に議事が進められたといってもよい

掲示板



- 栗平教会就任式 7月21日(日) 午後3:00
- 西南支区教師会 7月22日(月) 午後6:30
於 代々木上原教会
- 聖霊降臨節第11主日礼拝
7月28日(日) 午前10:15
説教 渡邊義彦東京教区総会議長
(柿ノ木坂教会)

編集後記



▽旧約で好きな聖句は「あなたの道を主に任せよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる」(詩編37:5)。行き詰まった時にも力が湧いてくる言葉です。(酒井)

「栄 光」2024 年 7 月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂 3-21-11
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
牧 師：岸 俊彦
編 集：栄光編集委員会
Email：kyodon@nifty.com
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp

でしょう。既に報告済みですが、渡邊義彦議長(柿ノ木坂教会)、伊藤英志副議長(三軒茶屋教会)、遠藤忠書記(むさし小山教会)が再選されました。本来任期は2年ですが、今回は任期1年となりました。コロナ禍による任期延長によって、2年毎の教団総会議員選挙と三役選挙が重なったためです。今後それを避けるための対策

です。常置委員は教職5人、信徒5人を選挙したのですが、それぞれ3人ずつ新しい常置委員が選ばれました。私もしも退任となり、世代交代が進みました。教団総会議員選挙は教職26人、信徒26人を選出します。教区全体から選出する第1選挙と、各支区から選ばれる第2選挙が行われました。第1選挙で、大友太郎長老が初めて教団総会議員に選出されました。10月に行われる教団総会で議論の輪に積極的に加わるものと期待しています。第2選挙は投票のみで総会は時間切れとなってしまうかもしれません。

1990年教区総会が開催されたとき、初めて出席しました。教団紛争のため、それまで20年間未開催でした。両国駅近くの公共施設で行われた総会は大荒れでした。ヤジ、ちょっとした乱闘……。議長団の1人は殴られた場合に備えて眼鏡をはずしていたと言われました。まさに隔世の感です。教会会議で選ばれた三役・常置委員を信頼し、任せればよいのです。私は建議請願審査委員会委員長を最後に、13年間の教区の責任を終えました。(岸 俊彦)